

## 「日向青島絵はがき」の成立と変容

Formation and Transformation of “Hyuga- Aoshima” Pictorial Postcards

倉 真 一 ・ 長谷川 司

大正時代、宮崎県そして青島が鉄道網の伸張にともない全国的な鉄道網に統合されていくなか、「日向青島絵はがき」は誕生した。当初、「日向青島絵はがき」の二大ジャンルは、「風景絵はがき」と「植物絵はがき」であった。これらの絵はがきを構成したのは、皇族や学者ら中央からの来訪者が「日向青島」にむける「統治のまなざし」や「科学のまなざし」であり、同時にローカルな生活世界における地元の人々による意味づけであった。その後、昭和に入ると「日向青島絵はがき」は大きく変容していくことになる。その変容過程の背景にあったのは、「統治のまなざし」や「科学のまなざし」にかわる「観光のまなざし」の優越化であり、「日向青島」とそのイメージが、ローカルな生活世界から「脱埋め込み化」されていくという二つの大きな変化であった。その結果、「日向青島絵はがき」における青島とそのイメージは「南国化」し、「白砂青松」にかわって「ビロー樹」をシンボルとする、「ビロー樹絵はがき」という新ジャンルが形成されていったのである。

**キーワード：**日向青島、絵はがき、ローカルな生活世界、観光のまなざし、脱埋め込み化

### 目 次

- I. はじめに
  - (1) 研究の目的 — なぜ「日向青島」の「絵はがき」なのか? —
  - (2) 戦前の「日向青島絵はがき」を分析対象とした理由
- II. 「日向青島絵はがき」の制作年代の推定と分析上の時期区分
- III. 昭和8年以前の「日向青島絵はがき」 — 中央からの二つのまなざしとローカルな生活世界 —
  - (1) 鉄道網の伸張と「日向青島絵はがき」の成立
  - (2) 皇族と学者たち — 二つのまなざしと「風景絵はがき」&「植物絵はがき」—
  - (3) モチーフのなかのローカルな生活世界
  - (4) “南国”の遠近法 — 最も遠く、最も近い南の島 —
- IV. 昭和8年以降の「日向青島」絵はがき — 「観光のまなざし」の優越化と「脱埋め込み化」—
  - (1) モチーフとしてのビロー樹の優越化
  - (2) 観光のまなざしと県外企業

(3) ローカルな生活世界から離床する「日向青島」

## V. 結論と課題

### I. はじめに

#### (1) 研究の目的 — なぜ「日向青島」の「絵はがき」なのか? —

宮崎市街から南へ、日南海岸の入り口に位置する青島は、戦前において「日向青島」<sup>(1)</sup>と称され、すでに宮崎県で最も有名な観光地であり、ときに戦後の「南国宮崎」観光の原点とも言われる。しかし「原点」と言われるわりには、観光地として青島の起源と流行について、私たちの知らないことは実に多い。青島はいつ、どのようにして観光客たちの美的な鑑賞の対象となり、社会学者アーリの言葉を借りるならどのような「観光のまなざし」を向けられ、特定のイメージ(例えば「南国」のような)を伴った観光地になっていったのか。少なくとも観光地としての青島に関して、これらの問いに対する十分な答えを、私たちは持ち合わせていないように思う。

一方、絵はがきというメディアは、観光(sightseeing)という極めて近代的かつ視覚的な営みにとって欠かすことの出来ないビジュアル・メディアだった。それゆえ絵はがきというメディアは、観光研究にとって第一級の資料たりうる。画像として切り取られた風景や写真に添えられたキャプションから、過去に誰が何に対して「観光のまなざし」を向けようとしたのか(あるいは「観光のまなざし」以外のまなざしが存在したのか)が浮かび上がって来る。また「観光のまなざし」の対象となった特定の場所や事物をどのような審美眼に基づいて弁別し鑑賞しようとしたのか。あるいは観光地という場所＝商品がいかにかに生産され、消費されていったのか。これら多くのことを、絵はがきというメディアは時代を越えてわれわれに教えてくれるのである。

だとすれば、われわれは青島を描いた数々の絵はがきを通じて、観光地としての青島の起源と「南国宮崎」の象徴あるいは原点となっていく過程について(逆に言えば、いまだ「南国宮崎」の象徴になっていなかった青島についても)、新たな発見をすることが出来るであろう。

#### (2) 戦前の「日向青島絵はがき」を分析対象とした理由

筆者はここ数年、上記の研究目的のために、モチーフの全体あるいは一部として青島を含む絵はがきを「青島絵はがき」と定義し、大正時代から現在に至る「青島絵はがき」の収集および分類、制作年代の推定作業を通じたデータベース化を引き続き行ってきた。収集した「青島絵はがき」の数は、パッケージ数としては50セット以上、枚数では500枚以上を数える<sup>(2)</sup>。

ただし本論文では、青島をモチーフとした絵はがきのうち、戦前期の絵はがきのみを分析対象として考察している(以下では、戦前の青島をモチーフとした絵はがきを総称して「日向青島絵はがき」と呼ぶ。「日向青島」と呼称する理由については、本論文の注1を参照のこと)。

なぜ、戦前の「日向青島絵はがき」に対象を限定したのか。理由は、戦後の「青島絵はがき」の収集数が、戦前の絵はがきに比して少なく、十分な分析を行うには不足だからである。古い絵はがきの場合、元々の絵はがき所有者が亡くなるなどして(例えば遺品整理といった形で)、まずは絵はがきの交換市場に出てくる場合が多いと思われる。その点で、戦後の絵はがきの場合、絵はがき所有者が健在の場合が多く、市場に出回っている数はまだ少ないのである。体系的かつ時系列的な分析を戦後の「青島絵はがき」について加えるには、なお若干の年月を必要とするかも知れない。

以下では、戦前の「日向青島絵はがき」を分析するにあたって、必要となる絵はがきの制作年代の推定方法と、分析上の時期区分について説明したい。

### II. 「日向青島絵はがき」の制作年代の推定と分析上の時期区分

絵はがきの制作年代を推定することは、その資料的価値を確保するうえでも、また具体的な分析対象とするうえでも必要なことであるが、実はとても難しい。そこで本論文では、細馬宏通が『絵はがきのなかの彦根』で紹介している比較的現実的な方法、すなわち絵はがきの宛名面にある「郵便はがき」の文字が、濁点のない「郵便はかき」から濁点のついた「郵便はがき」になった昭和8年(1933年)を基準点に、それ以前と以降の二つの時期に分けて青島の絵はがきを、まず制作時期の観点から大まかに分類することにしたい<sup>(3)</sup>。昭和8年という年は、宮崎で最初の地方博覧会「祖国日向産業博覧会」が開催された年であり、博覧会を契機に宮崎バス(現在の宮崎交通)の遊覧バスが一躍有名になるなど宮崎の観光地化が軌道に乗り始めた年でもあるので、「日向青島絵はがき」を分類する上でも、十分に有意義な基準年と思われる<sup>(4)</sup>。

そのうえで「青島絵はがき」の場合には、大正期から昭和初期の絵はがきで皇族の来訪に関するモチーフや説明文があれば、例えば、昭和天皇が「皇太子殿下」と記載されていれば大正10年以前、「摂政宮」では大正10年以降、「今上天皇」であれば昭和に入ってから制作されたことが判明する。あるいは他のモチーフでいえば、島内の老松が映っていないならば、ほぼ戦後の制作と推定できるし、「記念絵はがき」の類であれば、さらに厳密に年あるいは月単位での推定も可能だろう。その他にも、写真に写っている特定の建築物や地形などの有無、絵はがきに押された記念スタンプや消印の日付なども、必ずしも絵はがきの正確な制作年代を示すものではないが(写真のモチーフは写真の撮影時期を、日付は絵はがきの購入あるいは使用時期を示す)、ある程度は参考にすることは出来る。このようにして複数の手がかりをもとに、制作年代をさらに詳細に推定できる可能性が出てくるのだ。

つぎでは、上記の年代推定の方法に従って、まず昭和8年以前と昭和8年以降の二つの時期に制作年代を大きく分け、各時期における「日向青島絵はがき」のジャンル別の構成や特徴を抽出したうえで比較検討することにしたい。

### III. 昭和8年以前の「日向青島絵はがき」

#### — 中央からの二つのまなざしとローカルな生活世界 —

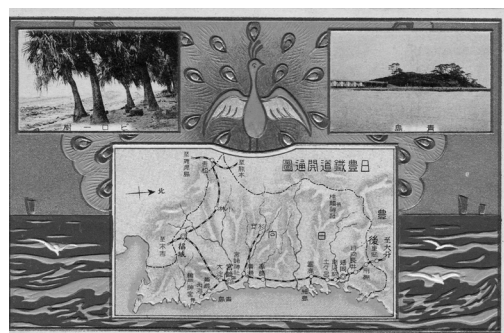
##### (1) 鉄道網の伸張と「日向青島絵はがき」の成立

「日向青島絵はがき」の多くは、絵はがきのジャンルとしては、いわゆる「名所絵はがき」に該当するものであろう。今日、私たちが観光地で普通に目にする絵はがきは、この「名所絵はがき」の系譜の延長線上にあるといつてよい。社会学者の佐藤健二は、『風景の生産、風景の解放』のなかで、この「風景絵はがき」が、国土全体に張り巡らされる鉄道網の伸張とともに出現した絵はがきの新ジャンルであった点を指摘している〔佐藤, 1994: 66-69〕。宮崎県内の鉄道が全国の鉄道網に組み込まれていった大正期は、まさに「日向青島絵はがき」が大量に制作され始めた時代に一致する。

青島に関していえば、大正2年に赤江（現在のJR南宮崎駅）と内海の間宮崎軽便鉄道が開業し、青島駅が設置された。宮崎軽便鉄道は、その後、大正4年には赤江（同年、大淀と改称）で国鉄宮崎線（現在の日豊本線）に接続することによって、全国の鉄道網に部分的にも組み込まれていった。筆者が収集した「日向青島絵はがき」のうち、消印などから使用された年代が推定できた最も古いものは、ちょうどその頃、大正5～6年頃のものである（資料1）。



資料1 大正初期の絵はがき



資料2 日豊本線の開通を記念する絵葉書

大正12年、日豊本線が全通し、宮崎県は（そして青島も）全国的な鉄道網にほぼ完全に組み込まれることになった。日豊本線の開通を記念して発行された絵はがきでは、「青島」とその「ピロウ樹」がモチーフとして採り入れられていた（資料2）。「日向青島」は全国的な鉄道網に組み込まれていくなかで、宮崎を代表する名所＝観光地として期待されていたのである。このことは、九州全体の国鉄網を統括していた門司鉄道局から、複数の「日向青島絵はがき」が発行されていることなどからも伺うことができる。

また同年、東京で発行された青島を舞台にした小説『開かれぬ扉』では、主人公は鉄道に乗って

青島にやってきて、また鉄道に乗って青島を去っていくのであるが、その中で絵はがきを買い求めるシーンが出てくる〔坂本, 1921〕(5)。

以上のように、鉄道網の伸張のなかで「日向青島絵はがき」が誕生したことが見て取れるのであるが、このことは鉄道が全国から青島に、「日向青島絵はがき」の購入者でもある遊覧客（観光客）を運んできたことのみを意味するものではない。

鉄道とは、都市社会学者の若林幹夫が指摘するように「中央集権的な（交通）メディア」である〔若林, 1992: 211〕。鉄道に「上り」と「下り」があるのは、まさに首都を中心にして、鉄道が各地方を国土として統合していったことを物語る。だとすれば、鉄道網の伸張はこうした中央—地方（ローカル）関係の再編を通じて、「日向青島絵はがき」に何らかの特徴を刻印することになるであろう。

##### (2) 皇族と学者たち—二つのまなざしと「風景絵はがき」&「植物絵はがき」—

全国的な鉄道網の伸張のプロセスは、そうした鉄道網を通じて、青島にやってくる中央からの新たな来訪者を生むことになった。皇族と学者たちである。

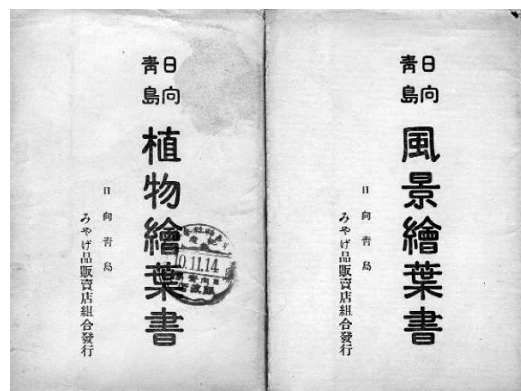
青島への皇族の来訪は、明治40年の皇太子（のちの大正天皇）に始まって、大正時代だけでも大正9年の皇太子（のちの昭和天皇）、12年の久邇宮、13年の北白川宮、山階宮、14年の秩父宮、伏見宮など数多い〔長友, 1978: 16〕。

また学者たちも、数多く青島に来訪している。青島を「熱帯植物自生地」として天然記念物に指定するよう推薦した理学博士で植物学者の三好学、青島を調査し「日向青島植物名表」を記した植物学者の牧野富太郎、林学博士で著名な公園設計者であり、『日州青島ノ保護利用策』と題する講演で青島とその対岸周辺の公園化を提唱した本多静六、理学博士で地質学者の脇水鐵五郎、史跡名勝天然記念物調査会のメンバーで青島に関する報告書を執筆した理学博士で植物学者の中野治房など、帝国大学教授クラスの学者たちが、中央から研究や調査等を目的に青島を訪れたのである〔安藤, 1928: 17-45〕。

彼ら学者たちによって、青島の自然、特にその植物群落が科学的に権威づけられることにより、青島は大正10年に「青島熱帯性植物産地」として天然記念物指定されるに至るのである。

皇族と学者というこれら中央からの来訪者たちは、それぞれ「統治者」あるいは「科学者」という権威者として、「日向青島」にまなざしを向け、それぞれ青島に対する新たな意味づけ、あるいは権威づけを行ったといえよう。それが皇族も訪れた「観賞に値する風景」としての青島であり、学者たちによって学術的に貴重なものとされた「観察・記録し、保護するに値する自然」を有する青島である。

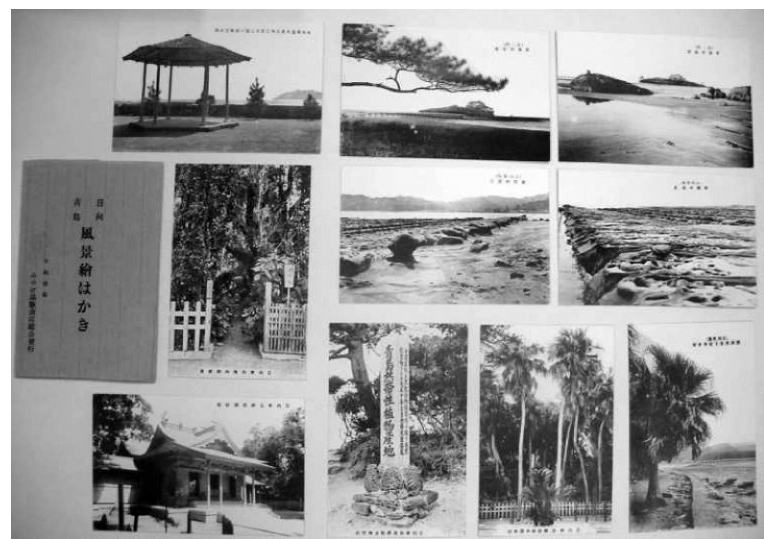
じつは中央からの二つのまなざしにもとづいた新たな意味づけ、権威づけが、昭和8年以前の「日向青島絵はがき」を代表する二大ジャンルを構成していくことになる。「風景絵はがき」と「植物絵はがき」がそれである（資料3）。



資料3 「風景絵はがき」と「植物絵はがき」の組み合わせ

資料3のように、「風景絵はがき」集と「植物絵はがき」集が、同じ絵はがきの発行元から二つ組み合わせで発売されることも多かった。また1枚の絵はがきのなかに、「風景絵はがき」と「植物絵はがき」のモチーフが同居している絵はがき集も存在していた。

「風景絵はがき」集の代表的な構成をみると(資料4)、大正天皇や昭和天皇の皇太子時代の行啓に関連したモチーフ、具体的には「皇太子殿下御野立の跡」、「皇太子殿下御休憩所」、「御成道」などが含まれる(資料5)。「日向青島」の「風景」は、まずもって皇太子(後の天皇)が眺めた風景として、位置づけられているのである。



資料4 「風景絵はがき」集の代表的構成



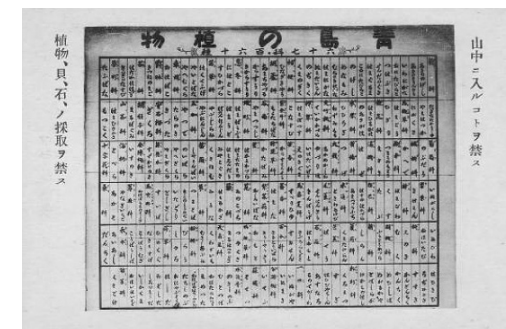
資料5 皇太子行啓に関する絵はがき



つぎに、「植物絵はがき」集の代表的な構成をみると(資料6)、中央からやってきた学者らが、天然記念物調査等を通じて採取、分類、記録、撮影された植物の図版と目録を、そのまま絵はがき化した観がある。「植物絵はがき」集のなかには、青島の各植物写真のほかに、植物の一覧と分類を記した表それ自体を、絵はがきのモチーフとしたものも存在する(資料7)。



資料6 「植物絵はがき」の代表的構成



資料7 「青島の植物」一覧の絵はがき

以上のように、昭和8年以前の「日向青島絵はがき」の二大ジャンルである「風景絵はがき」と「植物絵はがき」を構成しているまなざしは、中央からの皇族や学者という外部の他者のまなざしとすることができる。これらの中央からの二つのまなざしを、ここでは皇族に象徴される「(中央集権的な) 統治のまなざし」と、学者に象徴される「(博物学的な) 科学のまなざし」と暫定的に呼ぶこととしよう。

(3) モチーフのなかのローカルな生活世界

「風景絵はがき」集や「植物絵はがき」集が、皇室や学者らからの「統治のまなざし」あるいは

「科学のまなざし」を通じて構成されていったとしても、それは必ずしも、絵はがきのモチーフすべてが、そのようなまなざしによって規定されていたことを意味するものではない。なぜなら、昭和8年以前の「日向青島絵はがき」には、中央からの二つのまなざしに必ずしも還元できない、きわめてローカル色の濃いモチーフも、また多く認めることができるからである。

地元民のローカルな生活世界から選択された絵はがきのモチーフとして、具体的には、釣り人、漁民や子どもたちといった地元の人々、漁船や漁具、漁港などの生業（なりわい）に関するもの、家並み、地元旅館、伝統的な「白砂青松」の景観などを挙げる事ができる（資料8）。



資料8 ローカルな生活世界をモチーフとした絵はがき

このようにローカルな生活世界から、そのままモチーフが選択されていた背景には、昭和8年以前の「日向青島絵はがき」における発行元の多くが、実は地元にあったという事情がある。当時の地元における発行主体には、①青島神社社務所、②地元商店やみやげ物屋、旅館。具体的には、青島銀波店、吟松亭、杉本商店、杉本貝細工店、鈴木商店、日向青島みやげ品販売店組合など。③日向青島宣揚会や青島熱帯性植物園などの顕彰団体や施設などがあつた。

地元の人々は、中央からの「統治のまなざし」や「科学のまなざし」に媒介されながら、「日向青島絵はがき」を制作していったことは確かである。またその一方で、彼ら自身はローカルな生活

世界に内在しつつ、ある意味、「見たまま」や「感じたまま」の日常の風景をモチーフとして切り取ることによって、「日向青島絵はがき」を制作してもいたのである。

このことは青島それ自体、あるいは現在では青島のシンボルになっているビロー樹ですらも、こうしたローカルな生活世界とその住人たちにとって、その世界を構成する要素の一つに過ぎないことを意味する。「風景絵はがき」集においても「植物絵はがき」集においても、青島のビロー樹は重要なモチーフであったことには間違いないが、それは数多くのモチーフの一ついわばone of themという位置づけなのである。

しかし、ビロー樹ですら「日向青島絵はがき」のモチーフ群のone of themに過ぎないという状況は、昭和に入ると大きく変化していくことになる。この点については、昭和8年以降の「日向青島絵はがき」を考察するなかで、詳しくみていくことにしよう。

#### （4）“南国”の遠近法 — 最も遠く、最も近い南の島 —

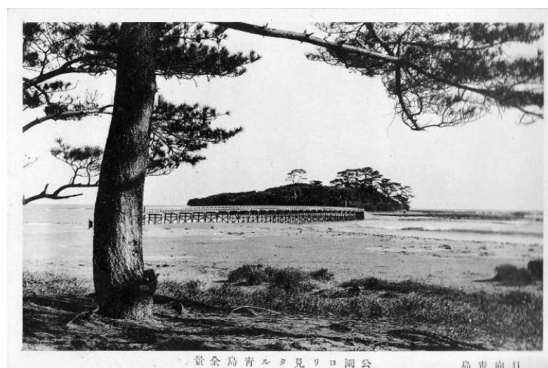
##### （4）-1 「青島遠景」 — 混在の妙 —

先述のように大正2（1913）年、軽便鉄道が開通すると、多くの人びとが、青島に足を運ぶようになった。彼らの目に映った青島とは、どんなイメージだったのだろうか。

世界再奇の風景たる日向の青島のごとき不思議なる処は、風景上より云うも、学術上より見るも復無かるべしと思う、此島にては芭蕉が華を開き実を結び、其他熱帯植物多く、殊に日本の本土に絶無なる檳榔樹（蒲葵）が幾百本となく亭々と直立し居り此くて純粹の熱帯の風景かと思えば、一抱も二抱もある松が檳榔樹の間に盤屈し、熱帯と温帯との風物が周囲僅十五丁の小島に盛るが如くに鬱蒼として居り、更に神代の古廟が其下に立つに至つては痛奇なる景象である。〔志賀、1916：165〕

これは、風景論で知られる志賀重昂（1863-1927）が、1916（大正5）年に著した大正期の青島の印象記「世界最奇の風景（日向の青島）」である。芭蕉や他の熱帯植物、ヤシ科のビロー樹が生い茂り、その中を、黒松の巨木がそびえ立つ。さらに、その下には、青島神社の社殿が鎮座する。熱帯と温帯の植物そして社殿。たとえ志賀の評言が、欧米に向けられた誇張的なものであったとしても、この文章からも、青島の基本的なイメージをうかがうことができる。あくまでも、青島を特徴づけていたのは、様々なイメージの混在だったのである。

戦前期の写真絵はがき、さまざまな風物が混在する青島イメージを映した典型的な絵はがきがある。まず、おどろき眼を引くのは、「青島全景」と題された一枚である（資料9）。



資料9 「日向青島 公園ヨリ見たる青島全景」

すなわち、この絵はがきは、島の全景を対岸から映している。島の中心部には、青島神社の鳥居も見られる。しかし、何にもまして驚きなのは、ほかの植物を追い抜いて亭々と伸びる大きなクロマツである。また、この絵はがきは、白砂が美しい対岸の松越しに島の全景をおさめている。白砂青松の浜辺にたち、島影を遠望する。こうした絵はがきは、同時期につくられた絵はがきにも共通して見られる。

#### (4)-2 南国をもとめて

「南国」青島のイメージのルーツをたどれば、18世紀のヨーロッパにまでさかのぼることができるかもしれない。当時、ヨーロッパの人びとは、豊かな自然に満ちた南海に楽園を追い求めた。なかでも、彼らを魅了したのは、生命力に満ちあふれたヤシの樹の姿だった。ヨーロッパの植物蒐集家たちが、熱帯ヤシを本国へと持ち帰り、華やかな庭園文化が開いたことはよく知られている。

おなじように、観光産業が、青島の「南国」イメージにその関心を向ける最初の大きなきっかけは、大正期の植物学者による島内調査にあった。1913（大正2）年、宮崎市街と青島をむすぶ軽便鉄道が開通した。これを機に、世にもめずらしい青島の「奇草奇木」、神域に生える「神樹霊草」を調べようと、多くの植物学者たちが訪れ、島内をくまなく調べ上げた。

島の植物群を包んでいた神秘のベールは、科学者の手によって剥ぎ取られていく。そしてやがて、科学的なまなざしは青島の植物を「熱帯植物」と同定する。温帯で生育する熱帯植物とは、語義矛盾のように思われるかもしれない。しかし、このことはさして問題とならなかったようである。わざわざ熱帯地方へ行かなくとも、熱帯の植物を調査できる。熱帯の気温に満たない気候を別にしても、「熱帯植物」の生態を観察できる調査地。温帯の日本国内で、熱帯の植物相をもつ青島。植物学者たちにとって、青島は生息地から集められた事物を一堂に集めた博物館、まさに「自然の標本室」さながらであった。

1921（大正10）年、島内は国の特別天然記念物（「青島熱帯性植物産地」）に指定された。このことは、青島の「南国」のイメージのさらなる強化、拡大につながった。

しかし、島内植物は、青島のイメージを構成する混在する風物の一つにすぎなかった。では、こうした青島の熱帯植物を、絵はがきはどのようにとらえていったのだろうか。

#### (4)-3 植物絵はがき — 近景としての青島 —

植物学者たちがもたらしたのは、青島の混在する風物の中から、植物を選別しそれらを「熱帯植物」に分類していく科学的なまなざしであった。このまなざしは、視覚メディアと深いかかわりをもつものでもある。

植物学者たちのまなざしに対応するのが、植物絵はがきであったとあってよい。ここにあるのは、植物絵はがきのうちの一枚「くはずいも」である（資料10）。写された「くはずいも」の右側には、その植物生態がくわしく紹介されている。まるで図鑑の1ページを開いてみたかのような構成であり、植物絵はがきの典型的な構図である。数千種ある島内植物の1種類をモチーフに選び出し、その生態的な特徴を説明する。その植物の形状を明らかにするために、全体にできるだけ迫るクローズ・アップで植物がとらえられている。



資料10 植物絵はがき「くはずいも」

絵はがきは熱帯植物を画面一杯に映しだす。植物絵はがきは、クローズ・アップによって、ひとつの植物に迫る。映像によって紹介され、学術的なキャプションがくわえられるのは、国内でもめずらしい植物である。他の植物はできるだけ写さないようにする。とうぜん、植物が生育する場所の風物が写されることはない。

こうしたフレーム操作は、映像演出の基本技術の一つである。撮影者はファインダーを覗き、なにをカメラにおさめるのかを決める。映像にきちんとモチーフがおさまるようにフレームを決める（frame in）。同時に、この動作は、何を選択しないか。つまり、何を映像から排除するのかを

選択していることにもなる（frame out）。すなわち、まずフレーム操作（frame in/out）によって、モチーフが選択され、ある主題をもったイメージが作られる。

カメラのレンズと映像フレームがもつ抽象／捨象効果が、近代の青島イメージを形成した。形成されたのは、もちろん「南国」青島イメージである。植物絵はがきは、島の遠景がもった風物の混在から、植物がもつ熱帯のイメージをとりだした。近づくことによって、混在する風物の多くは絵はがきの枠外へと捨象される。島の遠景に混在していた他の風物は捨象され、熱帯植物だけが抽象される。このことによって、ひとつのモチーフをもつイメージとして完結し、「南国」のイメージは形成されるのである。

#### (4)–4 匿名の「南国」

植物絵はがきは、青島の数ある風物のなかから植物のみを撮り出し、「南国」のイメージをつくりだした。しかし、植物絵はがきは、ジレンマを抱えることになる。

植物絵はがきは、「南国」青島イメージを形成したが、その一方で、他の風物の捨象をともなった。それゆえ、島から「南国」イメージを切り離すことにもなった。なぜなら、植物絵はがきは、島が持つ風物を捨象するがゆえに、できあがった絵はがきは、どこで撮影されたものか分からなかったからである。その絵はがきが「南国」的であればあるほど、固有地である青島のアイデンティティは失われ、「匿名の南国」を写したものになったのである。

青島が「南国」イメージをもつためには、この島に再び「南国」イメージを定着させなければならない。そのためには、現実からイメージがつけられるのではなく、イメージに合わせて現実が構築されなければならなかった。青島から「南国」イメージをとりだすのではなく、青島さらには日向を「南国」にしていくこと。それはとりもなおさず、観光地化を選択した青島の宿命であった。

## IV. 昭和8年以降の「日向青島絵はがき」

### — 「観光のまなざし」の優越化と「脱埋め込み化」 —

「日向青島絵はがき」にみられるモチーフやイメージは、昭和に入ると変容の兆しがみられるようになる（例えば、地元の発行元にかわって、県外の発行元が増えつつあった）。やがて昭和8年以降になると、「日向青島絵はがき」の変容は誰の目にも明瞭なかたちで現れてくる。

すでに述べたように、昭和8年前後の時期は、昭和6年の宮崎バス（現在の宮崎交通）による遊覧バスの運行開始や、昭和8年の「祖国日向産業博覧会」の開催などを契機に、宮崎の観光開発が本格化していった時期にあたる。と同時に、昭和初期は戦時体制下への移行が進みつつあるなか、同時に大衆文化の一つとして旅行や観光が活発化した時期であり、国家や都道府県や市町村レベルでも観光事業への積極的な取り組みが開始された時期でもあった [高岡, 1993]。このような観光地化の進展のなかで、「日向青島絵はがき」はどのような変容をとげるようになったのか。

### (1) モチーフとしての「ピロー樹」の優越化

次の資料11～12をみてみよう。主に昭和8年以前の地元で制作された「日向青島絵はがき」のパッケージのデザイン（左）と、主に昭和8年以降に制作された県外企業（和歌山県の大正写真工芸所）によるパッケージ・デザイン（右）を比べてみると、その違いは明白である。



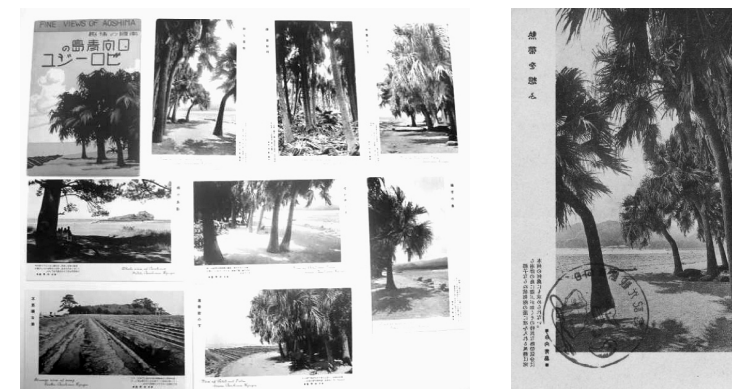
資料11 「白砂青松」をモチーフとしたパッケージ



資料12 「ピロー樹」をモチーフとしたパッケージ

昭和8年以前、地元で制作された絵はがきのパッケージ・デザインのモチーフは、いわゆる「白砂青松」である。それに対して、昭和8年以降に和歌山県の企業によって制作されたパッケージ・デザインのモチーフは「ピロー樹」に変化している。

先述のように、ローカルな生活世界の内部における、様々なモチーフの一つ、one of them にすぎなかったピロー樹が、モチーフとして前面に出てくるようになったのである。このようなピロー樹をモチーフとして前面に据えた絵はがきを、ここでは「ピロー樹絵はがき」と呼ぶことにしよう（資料13）。



資料13 「ピロー樹絵はがき」の代表的構成（左）と「熱帯を想ふ」（右）

この「ビロー樹絵はがき」の登場によって、昭和8年以前の「日向青島絵はがき」において二大ジャンルを形成していた「風景絵はがき」と「植物絵はがき」の組み合わせは、徐々に消滅していくことになる。なぜなら、「風景絵はがき」においても「植物絵はがき」においても、モチーフの一つに過ぎなかったビロー樹が優越化していく時、かつてビロー樹とともにモチーフ群を構成していた他の風景や植物はモチーフとして排除あるいは周辺化されていったからである。

「風景絵はがき」と「植物絵はがき」という二大ジャンルの消滅は、かつて両ジャンルを構成していった中央からの二つのまなざし—「(中央集権的な) 統治のまなざし」と「(博物学的な) 科学のまなざし」—がともに後退=交代を余儀なくされていったことを示すものであろう。では、それらに替わって、「日向青島絵はがき」を「ビロー樹絵はがき」へと変容させ、新たにヘゲモニーを握ることになった別のまなざしがあるのだろうか。あるいは、皇族や学者たちにかわって、「日向青島」にまなざしを向けたのは、いったいいかなる主体だったのか？

## (2) 観光のまなざしと県外企業

「ビロー樹絵はがき」において、新たに強調されるようになった青島のイメージは、「南国」、「南洋」、「熱帯」といったイメージであった。「ビロー樹絵はがき」には、ビロー樹の写真に加えて、説明文が付されているのだが、そのような説明文の文中には、「さながら南洋を思わせる…」、「鬱然と熱帯の景観を表す…」、「南風かほる常夏の…」、「南風に茂る…」、「南国気分の横溢せる青島神社」、「南国的情趣」、「熱帯を想う」といった言葉があふれている。「ビロー樹絵はがき」において、ビロー樹は青島の「南国」イメージのシンボルとなっているのである。

では「日向青島」を「南国」として眺めようとしたのは、いったい誰のどのようなまなざしだったのだろうか。まず言えることは、青島を南国とみなすのは地元の人々ではないことだ。なぜなら地元の人々にとって、「日向青島」は「日向」の「青島」であって、いわば<いま・ここ>の存在なのであるから、決して自分たちの南にある「南国」ではないからだ。では、「日向青島」に「南国」を見ようとするのは誰か。それは地元以外の外部の人々、具体的には東京や大阪をはじめとする都会の人々だった。

実際に、当時運行していた宮崎バスの遊覧バス広告では、「南洋の情緒横溢る青島は都塵にまみれし人々のオアシスで御座います」と案内されている。ここでいう「都塵にまみれし人々」が、東京や大阪などの中央や大都市の住民であることは明らかだ。では、東京や大阪といった大都市の人々は、実際の「日向青島」に何をみたのか。その点を明らかにするためには、ここでは絵はがきから少し離れて、都市住民でもある中央の文化人やマスコミ人が残した旅行記のなかから、日向青島について書かれた内容のみをみることにしよう。

昭和9年に刊行された『神国日向』は、大佛次郎ら中央の文化人たちが、宮崎を当時としては珍しく自動車で巡った旅行記である。そのなかで、詩人の田中純が青島を次のように評している（カッコ内は筆者）。

もし、この島に、幾本かの松の木さえなかつたならば、これは、純然たる南洋の一孤島の観を呈するに違ひないのである…（中略）…（猿や蛇がいれば）それこそ南洋そつくりの景色になるだらうと思ったのさ。〔國府&大佛&田中, 1934: 165-168〕

当時の青島には、島内のビロー樹の群落をつきぬけて、高く聳える老松が何本もあったのだが、田中はその老松さえなければ、青島が南洋そのものになるのに…と半ば残念がっているのだ。

続いて、昭和10年に朝日新聞記者・下村海南らの九州・沖縄への旅行記『南遊記』における、青島に関する記述をみてみよう（カッコ内は筆者）。

同行の堀朋近君はこの島に十数本?あるあの松の樹が目ざはりになるがどうですかといふ。いかさまその通りである。…（中略）…全島を全然南国情緒に浸すために…（中略）…尤も簡単に決行しうる事は内地植物特にあの松を刈り払う事である、之は文句なしに賛成である。名熱帯植物繁茂地として青島への評判が高くなつてきただけに、あの島のとつ付に四五本亭々と老松の聳えてる事は、青島への期待を裏切る事甚だしい。〔下村&飯島, 1935: 83-84〕

著者の一人である下村は、政府の国立公園委員会の委員を務めた人物でもあり、まさに観光客の視点から、青島を「南国」イメージで統一する必要と、そのための内地植物、特に島内の老松の伐採を提案している。ここで彼が中央からの旅行者として、青島に向けているまなざしこそ、アーリがいうところの「観光のまなざし」である。「観光のまなざし」とは、自然や都市、観光地などの風景を、視覚的な観賞の対象と枠付け、美化する視線の作用のことを指す〔多田, 2004: 27〕〔Urry, 1990=1995: ch.1〕。

中央や都会からの観光客たちが、「統治のまなざし」や「科学のまなざし」から自立した形で（すなわち、偉い皇族が訪れた場所だから観光するのでも、学者たちが学術的に貴重な自然があると指摘したから観るのでもなく）、純粋に「観光のまなざし」を通じて、「日向青島」を眺めようとした時、かれらのまなざしを枠付けていたものこそが、「南国」というイメージなのであり、その枠の中で美化されていったのが、松ならぬビロー樹だったということになる。

そして、以上のようなまなざしによる美化作用を最も熟知し、観光客が観たいもの（あるいは観たくないもの）を的確に絵はがき制作に反映することが出来たのは、日向青島の地元の絵はがき発行者ではなく県外の企業だった。これらの県外企業には、すでに紹介した和歌山県の大正写真工芸所のほかにも、京都の青旭堂や宇治山田の絵画研究会などがある。いずれも京阪神の大都市圏に近く、同時に南紀白浜や京都や奈良、伊勢など大観光地のそば近くに立地する企業である。このような立地条件の県外企業だからこそ、昭和8年前後より増加傾向を見せていた県外からの観光客の好みに最も合致した「ビロー樹絵はがき」の制作が可能だったのであり、その結果が地元から県外企業への「日向青島絵はがき」の発行元の移行をもたらしたと考えられる(7)。



### （3）ローカルな生活世界から離床する「日向青島」

絵はがきの発行元の地元から県外への移行によって、「日向青島絵はがき」のモチーフから以前は存在したローカルな生活世界を構成する人々や文化、自然といった様々な事物が抜け落ちていくことになる。これはある意味、当然の変化である。以前の「日向青島絵はがき」は、皇族や学者らの中央という外部からのまなざしにさらされながらも、作り手がローカルな地元民であったがゆえに、そのモチーフもローカルな生活世界に半ば埋め込まれていた。しかし、外部からの「観光のまなざし」が優越化するなか、作り手も外部の県外企業になってしまえば、そのモチーフはローカルな生活世界から積極的に切り離され、それとは無関係に選択されていくことになる。

こうしたなかで、青島それ自体が、対岸に存在するはずのローカルな生活世界から、さらにイメージのうえでも切り離されていく。例えば、先述の大正写真工芸所の制作した絵はがきのうち、対岸（の青島公園）より青島を遠望する構図の絵はがきを取り出し、制作年代順に絵はがき説明文の変化をみてみよう。すると、昭和8年前後の絵はがきでは、「風光明媚青島公園より渚近く美しき…」というように、まだ対岸との近さによってイメージされていたものが、時代を下るにしたがって、「白砂青松に映ゆる公園より夢のごとく渚にうかぶ…」あるいは「南溟に浮かぶ」となり、さらに下ると「日向灘にぼっかりと夢のように浮く…（中略）…付近の温帯地からとび離れて…」というように、むしろ青島と対岸の現実との断絶や距離感のほうが強調されていくのである。

このような「日向青島絵はがき」の変容は、「日向青島」とそのイメージがローカルな生活世界から離床し、「脱埋め込み化」していくプロセスとしても記述することができるだろう。ギデンズによれば、「脱埋め込み」とは、ローカルな時空間に埋め込まれていた社会関係、事物や文化的要素が、そうしたローカルな文脈から引き離され、無限の時空間に拡散し、再構築されるプロセスを指す[Giddens, 1990=1993: 33-36]。「日向青島」に関していえば、島とそこに自生するピロー樹という一植物が、「日向青島」というローカルな文脈を離れて、東京や大阪という外部の都会人の嗜好やイメージに合致するよう意味づけを変更され、台湾やマレー、ハワイをはじめとする太平洋の諸島群といった他地域と比較され、関連づけされるなかで、「日向」という内地にありながら「南洋」の外地のようでもある島や植物として再構築されていったのだ。

## V. 結論と課題

大正の初期に、宮崎県への鉄道網の伸張にともなって成立した「日向青島絵はがき」は、昭和に入ると変容をとげることになった。成立後の「日向青島絵はがき」と、その後の変容のプロセスを明らかにするために、本稿では昭和8年を基準年に、その前後の「日向青島絵はがき」の特徴を比較分析した。

昭和8年以前の「日向青島絵はがき」の特徴は、大きく以下の①～⑤の五点に集約することが出来た。

- ①主要なジャンルとしての、「風景絵はがき」と「植物絵はがき」の組み合わせ。
- ②「風景絵はがき」には青島を来訪した皇族の足跡のモチーフが含まれ、「植物絵はがき」では帝国大学教授らによる天然記念物調査を通じて採取、分類された植物の図版をそのまま絵はがきのモチーフにした観がある。いずれも中央からの皇族や学者が、それぞれ「統治のまなざし」と「科学のまなざし」を通してみた「日向青島」が絵はがき化された。
- ③絵はがきの発行元の多くが地元であること（例：青島神社社務所、吟松亭、杉本商店、杉本貝細工店、日向青島宣揚会、鈴木商店、青島銀波店、三島天真館、日向青島みやげ品販売店組合など）。
- ④地元民のローカルな生活世界のなかから絵はがきのモチーフが選び取られていること（具体的には、地元の人々やその生業、家並み、漁港、伝統的な「白砂青松」的な風景モチーフなど）。
- ⑤「青島絵はがき」のモチーフにおいて、青島のピロー樹はモチーフのなかの一つ（one of them）に過ぎなかったこと。

ついで昭和8年以降の「日向青島絵はがき」とその特徴を、昭和8年以前と比較しつつ、同じく五点に集約することができた。

- ①「風景絵はがき」と「植物絵はがき」という組み合わせの消滅と、それに代わる「ピロー樹絵はがき」の成立。
- ②それに伴って、ピロー樹が、モチーフにおいて優勢となり前面に出てくるようになる。前面に出てきたピロー樹は、「南国」イメージを象徴する記号となっていく。
- ③もはや「日向青島絵はがき」のモチーフを意味づけているのは、中央からやってきた皇族や学者の「統治のまなざし」あるいは「科学のまなざし」ではない。それは東京や大阪といった大都会からやってくる大衆（観光客）の「観光のまなざし」である。
- ④発行元における県外企業の台頭。それら県外企業の代表格が、和歌山県の「大正写真工芸所」である。
- ⑤「日向青島絵はがき」のモチーフから、ローカルな生活世界が排除されていく。「日向青島」とそのイメージが、絵はがきのなかでローカルな生活世界から「脱埋め込み化」されていったこと。

以上のように、「日向青島絵はがき」の変容の背景にあったのは、「日向青島」に対して、ローカルな生活世界の外部から向けられる「観光のまなざし」の優越化と、ローカルな生活世界から「日向青島」とそのイメージが「脱埋め込み化」されていく、二つの大きな変動であったということが出来る。

このような「観光のまなざし」の優越化と、「脱埋め込み化」にともなう「日向青島絵はがき」の変容は、戦後の青島絵はがきへと引き継がれていったと考えることができるだろう。ではどの

ような形で引き継がれ、戦後の青島絵はがきを特徴づけていくことになったのだろうか。あるいは、外部から「観光のまなざし」を向けられた地元の人々は、そのまなざしをいかに内面化していたのか。ローカルな生活世界からの「脱埋め込み化」が進む一方で、「再埋め込み化」によるローカルな生活世界の再編成は生じたのであろうか。これらの疑問に答えることが、戦後に定着する「南国宮崎」という観光が作りだした地域アイデンティティと、「日向青島」がその原点とされていくプロセスを理解するうえで、新たな課題となるだろう。

## <注>

- (1) 「日向青島」という名称は、戦前期に特徴的なものである。なぜ単なる「青島」ではなく、「日向青島」だったのか。その理由の一つは、青島が宮崎県＝「日向」の国を代表する名所だったことにあるだろう。加えて見逃せないのが、中国山東省の青島（チンタオ）と間違われることのないよう「日向青島」と表記したと思われる点である。第一次大戦の結果、ドイツから日本の植民都市となった青島（チンタオ）は、宮崎県の青島（あおしま）より当時遙かに知名度があった。実際、青島（チンタオ）の絵はがきの名称には、「青島」としか書かれぬものも多い。それに対して、宮崎県青島の絵はがきのほとんどは「日向青島」と表記される。戦前において、「青島」とだけ書けば、大方が青島（チンタオ）の方をまず想起してしまう状況があったのだ。
- (2) 収集した「青島絵はがき」の一部は、『絵はがきのなかの青島－青島絵はがきデータベース目録－＜試作版＞』としてデータベースを冊子化したうえで公表している。しかし、収録されている絵はがきは、パッケージ化された50の絵はがき集の約500枚に限られ、一枚ものの絵はがきは未収録である。また、データベース試作版の作成後に、新たに収集した絵はがきについても未収録である。今後は、ネット上での公開も視野に入れつつ、未収録のものを含めたデータベース完成版の作成を急ぎたい。
- (3) 絵はがきの時代推定の難しさとその方法に関しては、[細馬, 2007: 74-76]の「絵はがきの時代推定いろいろ」を参考にした。
- (4) 昭和8年に宮崎県で開催された祖国日向産業博覧会については、[倉, 2006]および[長谷川, 2009]に詳しい。
- (5) 同小説の作者である坂本石創は、日本旅行協会（現在の日本交通公社）発行の雑誌『旅』へも宮崎への旅行記を寄稿している（『旅』1924年4月号、5月号、7月号）。
- (6) 松本健一によれば、白砂青松の風景が日本の海浜景観として広く見られるようになるのは、江戸時代になってからのことであり、それを美しいと思う美意識も江戸時代につくられたものだとする [松本, 2009: 32-33]。その意味では、白砂青松を愛でる風景観は、かなり「新しい」伝統といえるかもしれない。しかし、少なくとも江戸時代から続く風景観の延長線上で

あるということ、また当時、青島に聳えていた老松や海岸線に広がっていた松原の存在を考えると、白砂青松の景観は伝統的であると同時に、地元の人々にとって、身近にあるローカルな景観だったことは間違いないだろう。

- (7) 県外企業のなかでも、特に和歌山の大正写真工芸所が最も多くの「ピロー樹絵はがき」を制作してきた点については、南紀白浜という観光地を近く控えていたことが大きいかもしれない。南紀白浜は、京阪神地区の都市住民にとって、最も身近な「南国」観光地であり、それゆえ彼らが抱く南国イメージに合致した絵はがきを作成するノウハウを、日向青島に対しても応用できたのかもしれない。あくまで仮説ではあるが、検証のためには大正写真工芸所発行の南紀白浜の絵はがきと日向青島の絵はがきを比較するなどの作業が必要となろう。

## <参考文献>

- 安藤時雄 1928 『日向の青島』平和印刷所。
- 國府犀東 & 大佛次郎 & 田中 純 1934 『神國日向』九州風景協会。
- 倉 真一 2006 「博覧会からみた宮崎の近代」『地域を創る－新しい宮崎をめざして－』（宮崎公立大学公開講座11）鉾脈社：53-79ページ。
- \_\_\_\_\_ 2008 『絵はがきのなかの青島－青島絵はがきデータベース目録－＜試作版＞』宮崎公立大学社会学研究室。
- 坂本石創 1921 『開かれぬ扉』恒星會。
- 佐藤健二 1994 『風景の生産・風景の解放－メディアのアルケオロジー－』（講談社選書メチエ）講談社。
- \_\_\_\_\_ 2007 「絵はがきと観光」、山下晋司（編）『観光文化学』新曜社：36-40ページ。
- 志賀重昂 1916 『志賀重昂全集 第6巻』志賀重昂全集刊行会。
- 下村 宏 & 飯島幡司 1935 『南遊記』朝日新聞社。
- 高岡裕之 1993 「観光・厚生・旅行－ファシズム期のツーリズム」『文化とファシズム－戦時日本における文化の光芒－』日本経済評論社：第1章。
- 多田 治 2004 『沖縄イメージの誕生－青い海のカルチュラル・スタディーズ－』東洋経済新報社。
- 長友隆二 1978 『青島神社造営誌』青島神社社務所。
- 長谷川司 2009 「戦前地方博覧会における地域イメージの構築－祖国日向博（1933）のケース・スタディ」『総合政策研究』No31 関西学院大学総合政策学部研究会：183-196ページ。
- 細馬宏通 2007 『絵はがきのなかの彦根』（淡海文庫38）サンライズ出版。
- 松本健一 2009 『海岸線の歴史』ミシマ社。
- 山中速人 & 長谷川司 2007 「メディアと観光－「太平洋の楽園」ハワイと「南国」宮崎におけ

るイメージの構築」、山下晋司（編）『観光文化学』新曜社:第5章。  
若林幹夫 1992 『熱い都市 冷たい都市』弘文堂  
Giddens,Anthony 1990 *The consequences of modernity*, Polity Press.  
=1993 『近代とはいかなる時代か—モダニティの帰結—』而立書房。  
Urry,John 1990 *The tourist gaze : leisure and travel in contemporary societies*,Sage,London  
=1995 『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行—』法政大学出版局。

### 絵はがき資料出典一覧

資料1 「広瀬旅館青島支店より見たる青島」 発行者不明（大正5～6年頃）  
資料2 日豊線鉄道協賛会 発行（大正12年頃）  
資料3 （左）『日向青島植物絵葉書』、（右）『日向青島風景絵葉書』  
ともに、日向青島みやげ品販売店組合 発行（大正10年頃）  
資料4 『日向青島 風景絵はがき』日向青島みやげ品販売店組合 発行（昭和8年以前）  
資料5 （左）『天下の奇勝 日向青島 風景絵はがき』青島神社社務所 発行  
（左）『日向青島 風景絵はがき』日向青島みやげ品販売店組合 発行  
（ともに昭和8年以前）  
資料6 『日向青島 熱帯性植物帖』日向青島宣揚会 発行（昭和8年以前）  
資料7 『天下の奇勝 日向青島 珍植物数種』発行元不明（昭和8年以前）  
資料8 （左上）「青島北海岸」パッケージ名不明 三島天真館 発行（大正10年頃）  
（右上）「青島の全景」『日向青島風景絵はがき』日向青島みやげ品販売店組合 発行（昭和8年以前）  
（左上）「日向の青島 青島村、折生迫港より青島及び公園森林の一部」『神都の日向 奇勝の青島』日向青島宣揚会 発行（昭和8年以前）  
（右下）「青島遠謀ト別荘地帯」『青島名所 絵葉書』杉本商店 発行（昭和8年以前）  
資料9 『日向名所 絵葉書帖 青島 熱帯植物之巻』吟松亭 発行（昭和2年頃）  
資料10 『青島神社 境内植物 絵はがき』青島神社社務所 発行（昭和8年以前）  
資料11 （左上）『日向青島 風景絵はがき』日向青島宣揚会 発行  
（中上）『日向名所 絵葉書帖』吟松亭 発行  
（右上）『日向 青島』杉本貝細工店 発行  
（左下）『青島名所 絵葉書』杉本商店 発行  
（中下）『神都の日向 奇勝の青島』日向青島宣揚会 発行  
（右下）『日向 青島』青旭堂（京都）発行  
（青旭堂発行をのぞき、昭和8年以前）

資料12 （左上）『南国の情趣 日向青島のピロージュ』  
（中上）『南海に浮ぶ夢と憧れの島 日向青島の麗色』  
（右上）『常春の島 日向青島』  
（左下）『南冥の風薫る 日向青島の景物』  
（中下）『南冥の風薫る 日向青島八題』  
（右下）『南国の情趣 日向青島のピロージュ』  
すべて大正写真工芸所（和歌山）発行（右下を除き昭和8年以降）  
資料13 『南国の情趣 日向青島のピロージュ』大正写真工芸所（和歌山）発行（昭和8年以降）

